

日本の戦争と宗教

1899—1945

小川原 正道・著

本書は、19世紀末から太平洋戦争終戦までという特定の期間における日本の戦争と宗教の関係について論じている。しかし読者は、本書の射程が、その前後に長く延びていることに気づかされるだろう。

太平洋戦争期における軍、外務省、文部省と宗教の緊密な関係については膨大な先行研究があり、よく知られているが、著者はその時代を特異な時期として孤立させまいとなく、むしろ

おがわら・まさみ
ち 76年長野県生まれ、慶応大教授。ハーバード大ライシヤワー日本研究所客員研究員。専攻は近代日本政治史、政治思想史、宗教行政史

本書全体を「時代連続的な研究」として叙述している。著者は本書の前編ともいえる「近代日本の戦争と宗教」（2010年）を著している。それを「前奏曲」、本書を「交響曲」と見なし

時代連続的な研究

評・小原 克博（同志社大教授）

ているように、戦争と宗教をつなぐ論理は、すでに明治期に胚胎し、それが昭和期に向かって、より緻密になっていく。ただし、当初、対立的な関係にあった仏教とキリスト教が20世紀に入ってから、国家の宗教政策のもと協力関係を持つようになるなど、見逃せない変化もある。

満州事変以降、神道、仏教、キリスト教が海外で布

教の範囲を拡大しつつ、支配地域での宣撫工作に従事していたという事実を知るとき、日本がアジア諸国をどのように見ていたかだけでなく、アジア諸国からどのように見られていたかを想像することになるだろう。本書は、この点を今後の課題としているが、読者にもその未完の問いは投げかけられている。

西洋列強に対抗できる近

代国家の建設を目指して日本は邁進し、宗教もその一翼を占めてきた。では、戦後社会ではそうした過去の歴史の反省を踏まえ、国家と宗教は「相互依存」関係を持たなくなったのだろうか。

憲法改正、小中学校での道徳の教科化、高校での日本史の必修化という議論を今後に控えた状況において、それらを単に安倍政権成立以降の短い時間軸で捉えるだけでなく、むしろ「時代連続的な視座」をもって考えていくことを、本書は促してくれているようである。

（講談社選書メチエ・17805円）

